

## 1-(4) 水稻採種技術の向上と組織強化による種子産地の維持

— 今後の産地を担う体制づくりに向けて —

### 1 活動のねらい

君津地域には県内最大の 166ha の水稻採種ほがあり、これは県全体の約 50% を占める。この採種ほを 4 つの種子生産組合が大きな責任を持ち、種子を安定供給するようにし、種子産地としての地位を確立している。

その一方で、4 つの組合は組合毎の状況が大きく異なっている。今後 5~10 年先を見据えた時に、安定的な種子生産を維持するためには、次の世代の担い手の確保及び規模拡大しても適期に作業できる効率的な技術の導入が必要である。

そのため、営農状況の聞き取りやスマート農業技術の紹介を行い、組合毎の現状把握及び活動方針の策定、及び次世代の担い手がどの程度スマート技術に興味があるかを調査するために活動を実施した。

### 2 課題の背景

君津地域の採種ほは、JA きみつ小糸採種組合 (37 戸)、JA きみつ小櫃採種組合 (14 戸)、JA きみつ君津種子生産組合 (2 戸)、JA きみつ富津市採種組合 (6 戸) の 4 組合からなる。概要として、小糸採種組合は比較的小規模の生産者が多く、残りの 3 組合は、採種ほ設置面積が平均 4ha と規模拡大している生産者が多い。また、君津種子生産組合や富津市採種組合は若手が多く、小櫃は後継者へのバトンタッチが順調に進んでいる。

これまで中核となる担い手が採種ほの面積を拡大していくことで産地としての面積が維持されてきた。しかし、規模拡大をすると、適期作業やイネばか苗病対策への労力が過大になる。安定的な種子生産をするために、ほ場の団地化に向けた取組を始めること、規模拡大をしても適期に防除作業ができる技術の導入を検討する必要があった。

### 3 普及活動の経過

#### (1) 各組合の今後の意向調査

地域の考えを集約し、共有できるようにするために、アンケート様式を作成し、聞き取り調査を実施した。特に、小糸採種組合は人数が多く、小規模の兼業農家が多く、今後の状況を優先的に把握する必要があったため、重点的に実施した。小櫃採種組合や富津市採種組合は後継者や若手の農家が多かったため、興味のある技術や今後の栽培について必要だと考えていることへの聞き取りに重点を置いた。

#### (2) イネばか苗病対策

本病は採種ほでは特定病害に指定されており、1 株も発生があってはならない。

また、千葉県は対策方針として、29 年産から採種ほの 200m 以内に中発生ほ場があった場合には採種を行わないこととしている。ほ場での抜取りは非常に労力がかかるため育苗中から小まめな巡回を行い、苗箱の交換等に対応するように指導した。

さらに、育苗中には無症状でも田植え後 1 か月程度経過すると発病することがあるため、各組合は班を編成し、ほ場地図を準備、田植え 1 か月後に、周辺ほ場を巡回し発生状況の確認を行った。発生が見られたほ場は全て手作業で抜取りを実施し、感染時期とされる出穂期の 10 日前までには基準以下になっていることを確認した。

#### (3) 適期作業実施のためのスマート農業技術紹介

採種ほは、製品としての種子を安定的に生産するために、防除や収穫、各作業時

期の適期を、主食用水稲よりも早めに、ほ場毎に見極めなくてはならない。例えば種子伝染性病害の防除では、早生品種では6月下旬に、晩生品種では7月上旬に全ての採種ほほ場に、梅雨の合間をぬって、薬剤散布をする必要がある。

今後の担い手は、経営安定化や農地の維持のため規模拡大をしていく中で、限られた期間内に大規模に散布する必要がある、効率的にかつ身体への負担が少ない薬剤散布技術が求められていた。そのため、特に関心の高いマルチコプターについて、メーカー及び管内で実際に使用している農家による実演会を開催した。



写真1 罹病株は全て抜き取る



写真2 マルチコプター紹介の様子

#### 4 普及活動の成果

##### (1) 地域ビジョンの作成及び団地化に向けた意識醸成

アンケートによる聞き取り結果を基に、今後の作付面積の見通し、組合員数の予想や興味のある技術、今必要と考えている事柄などを簡潔にまとめた地域ビジョンを作成した。

本地域では、毎年種子籾生産の成績書を作成し、組合員個々に配付しているの、それと合わせて地域ビジョンを配付し、地域で共有できるようにした。

また、イネばか苗病対策の罹病株抜取りには多大な労力がかかるので、発生が少ない地区へ採種ほのほ場を変更していくことの合意形成を図った。

##### (2) マルチコプターの利用開始

実演会では、実際のコストや使用農家の感想、導入における留意点などについて、活発な意見交換となった。さらに、メーカーが作業受託の形で防除作業を請け負う提案もあり、試験的に防除作業委託を検討する農家も出てきた。

将来的には、数戸で共同購入したい、と考える経営体も現れたので、利用形態毎の経営的な試算と共に、地域や関係機関との調整も進めていく予定である。

#### 5 今後の発展方向と課題

地域毎に差が出てはいるが、どの地域にも担い手の若手農家が育ちつつある。今後は若手農家間の交流や勉強会を通じて、種子産地を担う農家としての意識の醸成を図りつつ、技術情報の提供を図る。併せて関係機関と協力して新規農家の発掘を推進し、今後も高品質な種子を安定的に生産できる産地を維持していく。

#### 6 担当者

南部グループ、中央グループ、北部グループ

#### 7 協力機関

君津市農業協同組合、君津市、富津市、千葉県農林水産部生産振興課、同担い手支援課、農林総合研究センター水稲・畑地園芸研究所 成東育成地、NPO法人ちば農業支援ネットワーク